

ぼく ひもと  
僕たちが紐解く

うおぎき  
『魚崎』の

キオク

菊  
正  
宗

協力

魚崎町協議会

魚崎財産区議会

魚崎町防災福祉コミュニティ

魚崎郷まちなみ委員会

魚崎地車保存会

横屋地車保存会

発行年月日 2018年3月

発行責任者 甲南大学法学部

久保はるか

編集者 甲南大学 久保ゼミ

# まえがき

皆さんはじめまして、私たちは甲南大学法学部久保ゼミです。二〇一六年度より、ゼミ活動の一環として、『**大学周辺地域の歴史を知る シリーズ**』を作成しています。二〇一七年度の久保ゼミでは、東灘区の歴史やまちづくりを調べるなかで、街並み保存や地域防災の取り組みに力を入れておられる魚崎町に興味を持ちました。魚崎町は一九九五年一月一七日五時四六分に発生した阪神淡路大震災で大きな被害を受け、復興と共に姿を変えてきました。私たちはその「震災」を魚崎の大きなターニングポイントと捉え「僕たちが紐解く『魚崎』のキオク」と題し、魚崎の方々へのインタビュー記録を冊子にしました。魚崎に長く住み、地域に貢献されてきた方々の体験を通して、震災前から続く地域活動や震災後の変化について知る取り組みです。魚崎を知るために選んだテーマは以下の通りです。

- ・ 阪神淡路大震災の経験を活かした「防災福祉コミュニティ(防「ミ」)」
- ・ 魚崎町と神戸市とのパイプ役を担う「自治会」
- ・ 全国でも珍しい議会を持った「財産区」
- ・ 魚崎町では魚崎と横屋の二地域で保有される「だんじり」
- ・ 灘五郷の一つである「酒蔵の街並み保存」

お話を伺ったのは、魚崎町協議会、魚崎財産区議会、財産区議会事務局(東灘区役所内)、魚崎町防災福祉コミュニティ、魚崎郷まちなみ委員会、魚崎地車保存会、横屋地車保存会の方々です。それぞれの団体の活動について教えていただいたほか、各人の幼少期の魚崎の思い出、震災時の出来事や活動、現在の魚崎地区の様子などについて大変貴重なお話を伺うことができました。当冊子の作成に際しては、魚崎町協議会の粉谷勝巳会長に各団体の方々を紹介していただきました。粉谷会長、取材に応じてくださった皆様、会場を提供してくださった魚崎西町会館、わかばサロン、魚崎会館の皆様、この度はご協力頂きまして誠にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

## 私たちの「僕たちが紐解く『魚崎』のキオク」への思い。。。

- (一)これから魚崎を担っていく若者(震災を知らない世代)に震災前後の魚崎を知ってもらい、今後の防災に活かしてほしい。
  - (二)震災前の魚崎を知る人が少なくなってきた中、文字に起こして冊子という形に残すことで魚崎の歴史について将来の世代に興味を持って考えてほしい。
  - (三)震災後が増えた新住民の方々にも魚崎のことを知ってもらい、魚崎の歴史を話題として関わりをもってもらいたい。
- (四)魚崎地域の方々に日頃から見守って頂いている甲南大学の学生にとっても、魚崎地域について興味を持つきっかけになってほしい。

## 目次

- ・ まえがき ————— 1 頁
- ・ 震災を教訓にして『防「ミ」』 ————— 3 頁
- ・ 神戸市と住民を繋ぐ『自治会』 ————— 13 頁
- ・ 『酒蔵』のある街。魚崎 ————— 17 頁
- ・ より良い暮らしのための『財産区』 ————— 23 頁
- ・ 二つの『だんじり』 ————— 29 頁
- ・ 編集後記 ————— 37 頁

### 魚崎のマーク

旧魚崎町の町章は、「五百崎」の「五百」を図案化したもので、この「五百崎」の名の由来といわれる伝説には次のようなものがあります。

一つは、三韓出兵の際に神功皇后が諸国から軍船を集めたところ、この浜に五〇〇隻の船が集結したという伝説です。もう一つは、応神天皇の代に、伊豆の国から立派な船が献上されたが、その後老朽化して使えなくなったため、その船材を燃料として浜辺で五〇〇籠の塩を焼き、諸国にその塩を分け与えるので船を造るよう命じたところ、この浜辺に五〇〇隻の船が集まったという伝説です。



↑旧魚崎町の町章

(一)にぎわいネット」ホームページより)

# 震災を教訓にして、『防コミ』の方々のお話

防災福祉コミュニティ

(防コミ)

清原孝重会長  
石島幸治副会長  
明珍信宏副会長

魚崎町防災福祉コミュニティとは？

魚崎小学校区及び福池小学校区の一部を担当地域として地域防災、地域福祉の充実をはかり、安全で安心して暮らせる地域社会を実現することを目的として活動している団体です。また、福祉を取り入れた防災訓練をするなどして、今後三〇年以内に起こると言われている東南海地震に向けて対策を重ねています。

(「にぎわいネット」ホームページより)

## 一、震災時の活動について

〈Aさんの場合〉

震災当時、まだ防災福祉コミュニティはできていなかったたので、組織としては動いていませんでした。災害時には行政機能が麻痺してしまいます。そこで神戸市が作ったのが防災福祉コミュニティ制度で、魚崎では平成九年に魚崎町防災福祉コミュニティが作られま

した。したがって震災時にどのような活動をしたかというより、個人個人がどのような立場で何をしたのか、という話になると思います。私の場合、家が全壊しましたから、近所の人と助け合ったという話をまずしたいと思います。地域を見渡してみると多くの家が倒壊していました。その中で「おばあちゃんがこの家の下敷きになってる」と助けを求め娘さんがいたので、我々は素手で救出に当たりました。それが魚崎南町三丁目の自治会エリア。私は当時から自治会の会長を務めていたので、皆を集めて救出に携わりました。結果的に魚崎南町三丁目で四人の方が亡くなりました……。

また、避難所の運営にも携わりました。我々はそれまで、まさか神戸にあのような災害が来るとは思っていなかったたので、何の準備もしていないし何より心の準備ができていなかったと思います。これからどうなるのかな、

と思いつながらとりあえず避難所の運営を五百地公園で始めました。そこで皆で簡単な食事を作ったり、日にちが経ってからは、区役所の方へ救済物資の要請や物資の配布をするなどのお世話をしていました。しばらくすると自衛隊の方が到着して、近所のガレージに駐在し食糧支援をしてくださいました。四〇〇人分の温かいご飯を四〇〇五〇分間で炊ける炊飯道具を持って来て、我々に温かいご飯を提供してくれました。皆さん、お腹が満足すると気持ち的には落ち着いてきたのですが、今後どうなるのだろうかということを中心にしながら日常生活を送っていました。公園には家が潰れてしまったため、テントを張って生活している人もいましたね。

〈Bさんの場合〉

地震が起きたのは、私がちょうど会社に行くために起きようとした時でした。気が付くと、隣の家が倒壊して、二階部分が私の家の一階にもたれかかっているような状態になっていました。当時、朝日はまだ昇っていませんでした。少し薄暗い状況でしたが、徐々に明るくなると、南側の道路から北側へ倒れ込んでいるような状態の家々が見えました。今思い起こすとおかしいことかもしれませんが、そのような状況にもかかわらず、私は会社に行かな

ければならないと思っていました。私は建設現場の所長をしていましたので、地震が起きた後に自分の現場の建物がどうなっているのかということが気になって気になって。家族が安全なのは分かっていたので、背広を着て、なんとか阪神の魚崎駅まで辿り着いて、駅の二階に上がったのですが、電車が一向に来ませんでした。しばらくして一〇人くらい背広を着た人が来ました。私と同じように仕事に行こうとしていたのですね、「電車が来ないですよ」なんて話をレールの先を見ながらしていました。どれだけ待っても電車が来ないので、私は一旦家に帰り、その時に初めて我に返ったような状態でした。

それからまず、近所の女性・子どもを避難所の魚崎小学校に連れて行きました。その後近所に戻り、今度はそこで救助活動を行いました。救助活動では、少しだけ顔見知りの人に「埋まっている人がいて、まだ顔も見てへんねんけど、この倒壊した家の下敷きになっている可能性があるから手伝ってくれ」と声をかけられました。それまでは近所付き合いなんでほとんどありませんでしたから、近所の人とも顔見知りではなくて、このように声をかけられたところから救助活動を通じて関わりが始まるような状態でした。

一日目は八時くらいから救助活動を始めて、三軒ほどの倒壊した家から救助しました。そのうち二人は倒壊した家の下敷きになって亡くなっていて、もう一人は足を怪我していました。二日目以降は、魚崎小学校に行つて救助活動・避難所運営のお手伝いをしていました。避難所運営のお手伝いというと、救援物資を受け入れたり、それを配ったり、避難している人の健康状態を気遣ったりすることなどが思い浮かびます。が、実際に一番の問題はトイレが使えなくなつたことでした。「水が流れないから避難所のトイレが使えへん」と。当時は今の小学校のように洋式便所がなく和式便所だったので、便がいっぱい溜まつていて、男子便所も女子便所も同じ状態でした。それでも大人たちは理解して我慢しながら排便するのですが、子どもがやはり汚い所でしたくないと言いました。だから何人かで声をかけ合つて便を柄杓で取り、汲んだ湧水を引っ張つてきて流してトイレを洗うボランティアをしました。

加えて学校に送られてきた衣服などの救援物資を配る作業をしました。衣類の箱には新しいものも古いものも混在して入っていました。当時一番困つたのは、下着などが十分にベランダのカーテンを開けてみると、南側にある剣菱さんの酒蔵の屋根がなくなつてるのが見えました。そこでひとまず外に出て剣菱さんの酒蔵に行き、救出作業を手伝いました。ちょうどその頃剣菱さんには酒造りに入っている杜氏さんが五人いたのですが、なんとか一五人全員無事で良かった良かったと自分のマンションに戻つてみると、入り口のエントランスに二Mほど砂が溜まつていて、下に空洞ができていました。今言う液状化現象です。

帰り際に母親の家に立ち寄つたところ、住んでいた長屋が壊滅状態で瓦礫と化していました。周りの人は揃つて諦めたような顔をしていました。これで「母親は死んだんやな」と思いながら、一生懸命瓦礫の下に行つて母親の名前を呼んでいると、その自治会長さんが「ここに君の母親おるぞ」と助けてくれていました。何故助かつたと言いますと、母親の上にちょうど仏壇が倒れてきたのですが、そこにテーブルがあつたおかげで、その隙間に入つて助かつたみたいです。ひとまず母親を病院に連れて行つたのですが、満員状態で「もううちでは診れません」と断られてしまいました。その後、とりあえず休ませるために母親を背負つて魚崎小学校に行き、魚崎小

行き届いていなかったことです。もう一つはまだ離乳食まで達していない小さな赤ちゃんがおられる家庭に、幼児用のスキムミルクが行き渡らなかつたことです。お母さんの母乳が出なかつたらミルクを飲ませる必要があります。そこで、必要なものを必要な人のところから順番に分けて与えることを心がけました。そのような仕事を避難所で手伝い、それを避難所が解散する七月までずっと続けていました。最初の一か月はずっと避難所にいたので、会社には休みをいただいで手伝つていました。それで降は会社に行きながら朝と夜に手伝つて、休みがあればまた手伝うという状態で過ごしていました。そのような形で震災が起こつた時は対応させてもらいました。

（Cさんの場合）

私が住んでいた町内の住民は、約九〇%がマンション住まいです。地震があつた時、私が寝ている部屋には大きなタンスが三つあつたのですが、それがすごく揺れているのが分かつた時に、隣に妻が寝ていたので倒れたら大変なことになると思い、必死に押さえました。押さええていたら、自分の体がタンスと一緒に飛んでいくような感覚でした。その後落ち着いてから部屋を出てみると妻はテーブルの下に逃げていました。

学校の教室で母親を知っている人に預けました。私は当時子ども会の役員をしていたので役員さんの家を回つたところ、やはり多くの家が倒壊して、子ども会の会員さんたちの中で、三人のお子さんと一人のお母さんが亡くなつたと聞きました。中町も、ほとんど救出にも行けないような壊滅状態で、夕方には火災が発生し始めるような状況でした。

私はシステムエンジニアでしたので、三宮にある本社に行つてみると、そのビルも被害を受けていて、事務作業もできない状態でした。そのような中、社員全員に「社員は工場へ行くように」と指示が出ました。理由は、会社の方針で「地震があつて被害に遭つたのは分かるけれど、家族が無事であれば皆工場へ行き、まずはうちが支払わなければならぬ方には支払う準備をする。それから、新しい商品が欲しい方には供給する」ということになったからです。いつまでも甘えていてはいけませんと激が飛んで、全員で篠山の工場へ向かいました。その後は日曜日に魚崎へ帰つてきて、自治会長と一緒に救援物資を配るなどの手伝いをしていました。平日になったら篠山へ戻るのですが、その時の移動手段としては、まず西宮北口駅まで歩いて行き、そこから阪急線に乗って大阪へ出て、大阪から」

Rが動いていたのでJRで篠山へ行くというものでした。その時に感じたことは、阪神淡路大震災で被害を受けたほとんどの人は、リュックを背負ってスニーカーが運動靴を履いているのに対して、大阪に行ったら皆スーツ姿で、「何者や」という感じで見られたことです。ただ嬉しかったこともありましたが、散髪屋さんに行くこと「大変だったね」と散髪を無料にしてくれたり、お風呂を貸してくれる散髪屋さんまであったので、人の有難みを感じました。働く世代が被災に遭うと家族を守ると同時に会社も守らなければならぬので、それが非常に難しかったです。働き盛りの世代だと、災害に遭っても家族と離れ離れになってしまうことが多かったのです。

## 二、住民との繋がりによって助かったこと

例えば、倒壊している家屋の下敷きになっている人を助けるという話になれば、重機などが必要になりますが、私たちが持っているのはせいぜいバール程度でした。しかし、我々の住んでいる地域には解体業をやっている方がいらっしやっただので、「ここに人が埋まっているから手伝ってほしい」とお願いすると

他にも、ある地域での下宿学生の話があります。大学生が多く下宿していて、日頃はうるさいなあ、と思っていました。近所で家が倒壊したら真っ先に飛んできて救助を手伝ってくれました。また青木周辺に神戸商船大学の白鷗寮があり、かなりの人数の学生が生き埋めになったのを救出したという話も聞いたことがあります。

## 三、鳥取県江府町との関わり

およそ七〇年前、終戦間近の頃に、魚崎町の子どもと先生が二〇〇人くらい鳥取県江府町へ疎開しました。それをご縁に、戦後、江府町と魚崎町で交流が始まりました。阪神淡路大震災があつてからさらに交流が深まり、平成一二年に江府町と魚崎町協議会とで姉妹盟約を結んでいます。平成二五年には災害時の応援協定を江府町と結びました。これは東日本大震災で福島第一原子力発電所があのような事故を起こしたことを鑑みて、江府町の北側の方にも原子力発電所があるので、地震があつた時には魚崎へ避難できるように決めておこうという趣旨でできた協定です。魚崎町協議会で、毎年ではありませんが江府町との交流は行われています。

快く協力してくれました。三、四軒くらいは回った気がします。『気がする』というのはあの日自分が何をしたら覚えていないからです。一日四〇時間以上働いた気がします。今だったら救出する人に面識がないと「そんなの知らんわ」となるのかもしれないませんが、当時は皆で助け合おうという精神が生まれていました。

震災時の住民関係を振り返ると、災害時の物資配りや、子どもたちの面倒を見ることにしても、顔のまつたく知らない人同士でも、お互いに声をかけたら手助けをしてもらええるという有難みを知ることができました。例えば、一人で救助活動を二〇〇三〇分も続けていると手に血が滲んできてしまいますので、三人くらいに声をかけます。家族を魚崎小学校へ届けようとしている方や、まだ高齢者でない方に、「救助したいから手伝ってくれへんか」と声をかければ手伝ってくれました。「ちよつと待ってな」と言うこと本当に戻ってきてくれて、その救助活動を手伝ってくれました。だから、災害時の救助活動では人が困っている時、「手伝ってください」と声をかけることは重要だろうし、声をかけられた人がそれに応えるということが、一番頼もしく思えた経験です。

## 四、魚崎町防災福祉コミュニティの活動について

魚崎町防災福祉コミュニティ(防コミ)の活動では、東南海地震に備えてということで防災マップを作りました。阪神淡路大震災で我々が学んだことと言えば、自分一人では生きていけないということ、助け合うことが大事だということです。阪神淡路大震災を風化させないために、語り部等々で次の震災に備えようという活動をしています。最初に作ったマップは阪神淡路大震災を踏まえて作りましたので、地震があつても津波は想定していません。だから救助するのに何時間かけても助ければよいという想定で作られていました。ところが平成二三年に東日本大震災があり、地震の後に津波が来るのが分かったのです。では魚崎の場合はどうなんだという話になりました。今度の南海トラフ地震が発生した時に、魚崎の場合だと約一〇分後に津波が来ます。だから新たに地震と津波を想定したものに直さなければならぬということ、新しく防災マップを作りました。南海トラフの地震は今後三〇年以内に七〇%の確率で起こると言われています。明日起きるかもしれませんので、何をすべきかというのを防コミ

は考えています。

地震が起きたら逃げれば良いというわけではなく、その準備ができていないのかというところが今一番の問題ではないかと思えます。例えば障がい者の方が災害時に自力で逃げるのは困難ではないかと考え、我々はその方たちを『災害時要援護者』と呼ぼうと決めて、その人たちの支援をどうするのかということも、今回のマップには記載しております。やはりそこが魚崎町防コミの取り組みの中で一番重要な活動だろうと思えます。

我々は手上げ方式を採っていて、要援護者の方々が自ら「私は災害時に自力で避難できません」と登録するように告知しています。そして一度個人情報登録したら放っておくのではなく、個人情報頼りに登録者の安否確認をしています。年に一回、新規登録の募集をしますが、それと同時に要援護者の支援方法を検討することが重要だと考えています。例えば私たちの地域では、二月に餅つきをやるから、その餅を持って要援護者の登録をしている方の所を訪問して、お変わりありませんかと尋ねていきます。しかし年に一回の訪問では不十分だと考えたので、我々は民生委員に普段から目をかけてくださいとお願ひしています。

### 五. 統括防災リーダーとは

正式名称は『地区統括防災リーダー』といます。災害時、情報を収集して、地域住民を安全に避難できるように指示していく人を統括防災リーダーと呼びます。防コミ加入自治会が二〇あるので、各自自治会がそれぞれの地区統括防災リーダーを決めています。防コミのメンバーが普段六〇人近くいるのですが、災害時に全員いるとは限りません。仕事に出て行っていたり、何かの下敷きになって動けないかもしれない。誰がリーダーかと言えば、候補者は、普段いる自治会長や防コミのメンバーですが、災害時には健康であり防災の知識があつて、かつ冷静な判断ができる人ならば、その人を地域のリーダーとして災害から皆を守るといふような役割を与えます。これが統括防災リーダーという意味合いです。つまり魚崎地区では誰もがリーダーとされます。リーダーになった者が皆をリードしながら安全確保へと向かう、そのような統括防災リーダーの育成も防コミの目的の一つです。

また災害が起こらなくても、防コミの一番の目的はまちづくりですので、住民同士の繋がりがづくりに防コミが一役買えれば良いな、

防災と福祉とは両立していないと駄目です。防災だけだと災害時要援護者を発見することもできませんし、どのような支援をしなければならぬかも分かりません。災害時は何が起きるか分かりません。例えば今は元気だけど、ひよっとしたら地震のせいで骨折して動けなくなるかもしれない。だから要援護者というのはもっともっと幅広いものであると認識してほしいと思っています。



↑魚崎町防コミの津波防災マップ

と思っています。災害時を想定しながら声かけができて、顔の見える関係が作る事が大事になってきます。そういうまちづくりが普段の生活の中にも必ず必要になります。要援護者や障がい者や体の不自由な高齢者がいれば声をかける。それは見回り活動にも繋がります。防コミには災害時を想定した目的があるけれど、災害時でなくても普段の付き合いから、新しい住民と古い住民が入り混じって古い繋がりがなくても現在の生活において交われるということが、街の安心安全に繋がります。繋がりができた後に魚崎の歴史を知ってもらえたら、と思っています。

### 六. 魚崎町防災福祉コミュニティの担い手

震災時には、自治会がない地区がありました。自治会がないと行政とのパイプが通らず行政に物申すこともできないことに加えて、救援物資も届かないという状態でした。災害時に、自治会がいかに大事かを身に染みて理解しました。それが震災後新しく自治会が作られた理由です。新しい自治会は自治会活動といつても最初は手探りの状態ですから、防災福祉コミュニティがあるから、防災を中心

に自治会活動を展開させよう、という理由で防災に熱心に取り組んでいます。そのような訳で防コミよりも後からできた自治会の方が動員力もあるし熱心です。

自治会の一番の問題は、役員の高齢化が進んでいるということです。また若い者にどう引き継ぐかが重要な課題で、それを解決するために中学生で構成されたジュニア防災チームを作りました。彼らは何年後かには成人していくので、その時まで我々がきちんとリーダー性を発揮できるように育てていかなければならない、と考えています。その中学生たちが将来どこに行くか分かりませんが、全国に散らばっていくかもしれない。ですが、災害は魚崎だけではなく全国のどこで起きるか分からないので、魚崎で学んだ知識や経験で家族や同僚の安全を守ったり、普段顔見知りでもなくとも地域住民の安全を守ったりできるような子どもたちになってほしいと願っています。その時の経験は体で覚えるとなかなか忘れないでしょう。だから防コミとしては、知識も大事ですがその経験が将来世代に役立つのでは、と思いつくジュニア防災の人にも参加してもらい、訓練を一生懸命行っています。こちらから役割を与えるのではなくて、子どもたちが自主的に防災について考えられるようにしたいなと思います。要保護者の支援センターなど、私たちとの繋がりが薄かった所とも連携が取れるようになってきたというのが、近年の魚崎の強みの一つです。

## 八. 今後の魚崎をどのようにしていきたいか

一つのボランティア団体の目標として、安全で安心な街を作っていきたいと考えています。地域住民も含め皆で協力して、関係機関にも協力してもらい、安心安全なまちづくりのために頑張っていきたいなと。自分でできることは自分でやろうと考えています。

それから魚崎には自治会が二あり、情報交換のできる場所が多いので、新しく入ってきた住民の方も違和感なしに輪に入ることが出来ます。地元意識の強い、「昔からこの地域に住んでいるから偉いんだ」という人がいないことも良いところ。昔からある催しを何とか残していこうと考えていて、他の地域なら新しい住民は入りにくいかもしれないですが、魚崎であれば入りやすいことが特徴的です。そのような催しを通じて新旧の住民がもっと仲良くなってほしいなと思います。

うになってほしいです。

## 七. 魚崎の好きなところ

人間関係です。阪神淡路大震災を経験して何故魚崎がいいか改めて考えると、新旧住民の隔たりがあまりなくて、地域で人間付き合いがしやすいからだと思います。地域の中で一つの小学校、中学校しかないため、子どもたちが入学した時に知り合った保護者の方が中学校でも同じなので、その時に人間関係ができます。つまり一体感・連帯感を持てる人間関係が形成されます。私は、そういう人間関係が気さくなところが、魚崎の良いところの一つではないかなと思っています。

今は子どもや障がい者、高齢者の居場所作りなどについても防コミのメンバーの中で話し合っています。その成果の一つがオレンジリング、所謂認知症サポーターです。認知症のことを知ろうというのも、防コミの活動の一つになっています。防コミ自体に人間関係ができてきますと、皆は自分が住みやすい街にしたいので、色々なことに顔を突っ込んでいくようになります。逆に言えば周りの人から防コミに声をかけてもらったら、うちの会長さんは断れないので(笑)、ぜひ声をかけ

取材日 二〇一七年 一月一六日



↑左から明珍さん、清原さん、石島さん

# 神戸市と住民を繋ぐ『自治会』

魚崎町協議会 粉谷勝巳会長

自治会では阪神淡路大震災時、震災後にどのような活動をされていましたか？

魚崎財産区所有の横屋会館、魚崎会館、西町会館、わかばサロン、四つの会館と魚崎小学校が（事実上）避難所になっていました（会館およびサロンは神戸市の避難所に指定されていません）。住民はそれぞれ一番近い場所に避難していました。その避難所がある地区の自治会の会長さんが避難所の責任者となって避難所のお世話をしていました。

避難所には、魚崎町協議会と姉妹盟約を結んでいる鳥取県江府町の方たちが物資を届けてくれました。毛布を集めたり、おにぎりを作って届けてくださいました。向こうでは奥大山の水を生産しているから、それを何百本といただいで、町内に配っていました。江府町の方たちは義援金も集めてくださって、それも頂戴しました。その義援金をもとに、慰霊碑を建てました。その震災慰霊碑は魚崎小学校の西側にあるわかばサロンの庭にありま

す。二〇六名の方が魚崎で亡くなられて、その全員の名前が刻まれています。その名前の配列は魚崎の地図を表しています。甲南町、魚崎北町、中町、南町、それから住吉川の向こうで西町と。そして、この慰霊碑は江府町からの義援金を基にして作ったので、この慰霊碑の裏の銅板には、鳥取県江府町、魚崎財産区、魚崎町協議会の三者で建てたということが書かれています。



↑震災で亡くなった方のために建てられた慰霊碑

粉谷さんは震災の時、個人的にはどのような活動をされていましたか？

個人的な活動としては、当日は自治会内で瓦礫に埋まっている人を助け出したりしていました。その後は慰霊碑を建てることに奔走しました。震災の時に江府町の方が来てくれて、義援金を頂いたから、とにかく慰霊碑を建てないといかんということで、前魚崎町協議会会長と一緒に奔走していました。

私自身は、二日後くらいから娘の会社の寮に避難していました。西宮北口に会社があったので、役員が泊まったりする社員寮に避難させてもらいました。そこに一ヶ月くらい居ましたが、魚崎小学校の西のマンションに昔からの知り合いがいて、ちょうど震災の前年に引越してきて空き家になっていたので、そこをお借りして、その間にこの店（粉谷さんのお店）と裏の自宅を再建しました。明るくなる年の三月に立て直しが終わりました。

避難所の運営は役所の方が仕切っておられたのですか？

役所は一切しないです。避難所の運営は自治会でやりました。食料や水は、避難所を作

ったところに届きます。これはもちろん役所が把握して送ってくれていましたけれども、それも消防団の方が各避難所に運んでくれていました。

自治会がなかったら避難所も成り立たなかったということでしょうか？

そうですね。やはり、避難所には誰か指揮者がいないと、配布物とか仕分けが成り立ちません。だからリーダーを何人が指名しておけば、食料などの配布もスムーズにいきます。

新居住者との関わり合いは？

新しい住民のほとんどはマンションに入るので、まず、そのマンションの理事長さんに自治会の役員に入ってもらって、マンションごと自治会に抱き込むことにしました。マンションに入居する時に自動的に自治会に入るような仕組みにしたわけです。そのために、マンションを建てる時、自治会に全員参加するのであれば建築を認めるということとしました。私は魚崎東部自治会会長ですので、建築主と話をして会員がいややといえど管理組合として入ってくれと頼むわけです。区域に



は三六〇世帯ありますが、戸建とマンション  
だったらマンションの方のほうが多いです。

東灘区の人口はぐっと増え続けています。  
なぜかという、先ほどもお話ししたようにマ  
ンションがたくさんできたからです。そのマ  
ンションは震災で潰れた酒蔵の跡地に建った  
のです。そこに若い人たちが入ってきました。  
だから、魚崎小学校は子どもの数が多いので  
す。魚崎は少子高齢化ではなくて多子高齢化  
なんです。魚崎小学校の児童数は一三〇〇人  
近くいて日本一、二です。でも、今後だんだ  
ん減ってくると思います。というのは、移住  
してこられた方がマンションに入居して、子  
どもができて、その子どもが小学校に行つて  
その子たちが魚崎に定住してくれたらいいの  
だけど、結婚するところか外へ出て行くだろ  
うから、子どもたちが大きくなっていくと人  
口は減っていきます。

魚崎のマンションは丸ごと自治会に入る  
と仰ってましたが、一軒家に新しい方が  
引っ越して来られた場合はどうするの  
ですか？

自治会では道路で割った区域で班を作つて  
いて、各班に班長さんがいます。その班長さ

それから暗い場所にね、公道だったら神戸市  
が防犯灯を付けてくれますが、私道には自治  
会で防犯灯を付けて、その維持管理も自治  
会がしています。

それから、魚崎児童館などでイベント等を  
やる時に自治会の会長たちがお手伝いしに行  
くとか、いろんな自治会が集まってイベント  
をやるといふような事もしています。あとは  
年に一回、児童館から自治会で何かやって欲  
しいという依頼があったりします。それで九  
月か十月あたりに、自治会がプログラムを組  
んで児童館に子どもたちを集めてイベントを  
行います。だいたい何か物作りをしようとい  
うことで、以前は自分たちで竹で竹馬を作つ  
て、乗ってごらんつて事を子どもたちにして  
あげていました。ここ三年ほど前からは水鉄  
砲に変えました。竹で作った水鉄砲です。太  
い竹と細い竹を使って子どもたちにつくらせ  
て、児童館の外で、バケツに水を汲んできて  
どれだけ水が飛ぶかみたいな事をやっていま  
す。そういう事も自治会でやっています。

粉谷さんにとって自治会とは？

自治会は地域に必要なだと思います。昔の戦  
争中の「隣組」という意識ではなく、もつと

んが引っ越して来られた方を勧誘に行きま  
す。「ここにはこういう自治会がありますの  
で入ってくださいませんか」と。そうしたら一軒  
家でも大体の方は入ってくれます。そして、  
その新しく入ってくれた方に班長になつても  
らつたりします。班長を順番に回していくん  
です。また、マンションの理事長にも班長に  
なってもらいます。そうすると、町内のこと  
についていろいろなことが伝わります。

現在の自治会の活動内容は発足時と違  
いますか？

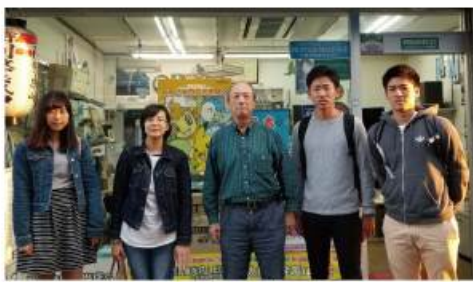
いえ、基本的には変わっていません。若い  
人が出てきて「これしたらどうですか。」と  
言ってくれたら考えるけど、誰も出してこ  
ないので。今、自治会では、若い人を少しづつ  
役員に入れていくこともしています。でも自  
治会に入っているけど、関心がないという  
のかな。長く住んでいる人の顔はわかるけど  
も、マンションに住んでいる人はあまりわ  
からないです。

自治会の区域内に掲示板が七つあるので、  
神戸市から掲示物をその掲示板に貼っていま  
す。このようなことが自治会の役目で、神戸  
市と住民とのパイプとなつていているわけ  
です。

自治会を通じてご近所づきあいをするという  
ふうにしたいと思いません。それから、それ  
から役所関係のことも、自治会が役所に電話  
するとすぐ聞いてくれます。役所とのパイ  
プ役として自治会は必要だと思います。

東灘区自治会連絡協議会というものがあつ  
て、各地区四人ずつ出てきて役員をしていま  
す。自治会連絡協議会の総会の時にみんな出  
て来るわけだから、そこで他の自治会の人と  
も顔見知りになれます。それは自治会がある  
から、その一つの町内だけではなくて他の町  
の人とのとの関係もできます。

取材日 二〇一七年 一〇月二六日



↑粉谷さんのお店「でんきのコタニ」の  
前にて、中央が粉谷さん、ほかゼミ生

# 『酒蔵』のある街。魚崎

魚崎郷まちなみ委員会 今村政廣事務局長

魚崎郷まちなみ委員会とは？

阪神淡路大震災で崩壊した酒蔵の街の再興を目指して設立されたもの。神戸市都市景観条例に基づいて「景観形成市民協定」を締結しており、新しく建物を建てる場合や大幅な増改築を行う場合に、建築主の方に対して魚崎らしい和風のデザインを取り入れていただけるように話し合いを行います。他にも清掃活動等を行うなど、きれいな和風の景観を守る活動を行っています。

今村さんは魚崎郷まちなみ委員会でのどのような活動をされてきましたか？

震災の前は、自治会活動をしていました。子どもが小学校の時のPTA活動から地域との関わりが始まりました。そこから今日に至っています。地域活動は一回入るとなかなか抜けられません（笑）。それで色々なことを頼まれて、PTA副会長や、中学校の会長などを、色々やりました。

まちなみ委員会の事務局長は一九年やっています。これはボランティアで、自宅が事務

酒蔵は震災で殆ど倒壊してしまったのですね。

櫻正宗さんが今年で創業三〇〇年になります。そこも震災で全て倒壊しました。

当時は昔ながらの街並みで雰囲気の良いところでした。今あるのは菊正宗、宝酒造（現在は青木に移転）、剣菱、櫻正宗、浜福鶴の五社です。昔は魚崎郷にも一二社ほどありましたが震災後に転廃業しました。

まちなみ委員会で、初めにまちづくり協定のルール（魚崎郷景観形成市民協定。以下「市民協定」とする）を作ろうとなつたのは、古い和風のまちを維持するためだったということでしょうか？

そうですね。昔の文化を後世に引き継いで行こうと。昔なりの江戸時代の建物はもう当然出来ないで、二一世紀型の和風の街並みを再現できないかと、そういう活動を目的にしています。

市民協定のルールは紳士協定で強制力が

所兼会議室です。月一回の定例委員会は会館を借りています。

震災前の街の様子は、黒板塀の酒蔵ばかりでした。もうそれこそ絵になる風景ですね。交差点の角にはキャンバスに酒蔵の絵を描いている人がたくさんいました。今では、商店ができて賑やかになってその面影はありませんが、昔は六時になると真つ暗で人通りも無いくらいでした。それが震災後、酒蔵跡地に店が建ってこんなに賑やかになるとは思いませんでした。また酒蔵の跡地にはほとんどマンションが隣接して建設されました。



↑震災前の酒蔵（今村さん所蔵）



↑震災時の酒蔵（今村さん所蔵）

ないため、実際に建物を建てる際に、相手方がルールを守ってくれないこともあるとは思いますが、その時はどうされていますか？

建築確認申請がおきる前に、事前相談申込書の届け出が委員会にあります。建物を建てる時に、最初は役所に行くわけです。すると役所がまちなみ委員会に知らせてきますので、申込書に記入していただきます。新築はもちろん大幅な増改築も含まれます。それにパース（建物の外観や室内を立体的な絵にしたもの）を添付していただきます。例えばロイヤルホームセンターさんには和風にしてほしいと要望して、看板を古風に、屋根も切妻風にしていたかったです。このようなお願いをするわけです。だからまちを少し歩いていただいたら、塀の上にはちよつと棟瓦をのせていたり、少し雰囲気が違う様子が分かると思います。完璧な和風をお願いするのは難しいので、少しでも目につく範囲に和風を取り入れていただけないかとお願いをしています。私たちはお城のようなマンションを作ってくれと要望している訳ではありませんが、完璧な和風をお願いするのは難しいので、少しでも目につく範囲に和風を取り入れていただけない

いかとお願いをしています。例えば住吉川の東の大きなマンションですが、川沿いのフェンスの扉に棟瓦をずーっとのせてくれていいます。和風な感じを出してくれています。協力してくれるところとしてくれないうところがありませんが、お願いで事前相談に来ていたのだいたところは大体協力してもらっています。

対象となるのは一軒家だけではなくてマンションも全てですね。

はい、すべてです。すべての建物について事前相談で要望を取り入れていただきます。他にもセブンイレブンさんやローソンさんも和風を取り入れてくれています。屋根の形状がフラットではなくて切妻風になっています。

強制力がないので難しいですか？

そうですね。市民協定だから嫌と言われたらどうにもできないです。

一つの案件を受けてからどれくらいの期

ら後世に伝えていきましょよ」と説得しなければなりません。

この市民協定のルールを新しく更新される予定はありますか？

来年二〇周年を迎えるにあたって、ルールが少し変わります。基本的には和風を取り入れてもらおうという活動は続くと思います。しかし少しルールが変わるといことは言っていました。それも行政・住民・企業で一緒になって変えていくのだからと思います。委員会の委員長がもうすぐ八〇代になります。が、なかなか活動派の方で、街のいろいろな通りに酒蔵のプレートをつけようと活動をはじめていきます。その次に酒蔵風のマンホールの蓋を作ろうと準備しています。今現在、デザインを制作し、行政に申請中です。当委員会の会長がこのようなことを発案しています。

間が必要ですか？

一番長いので二、三ヶ月ですね。会合が月に一回ですから。三回かかれば三ヶ月、もちろん一回で終わるともありません。景観道路に面している大きな建物は時間がかかったところが多いです。

震災で酒蔵が無くなった後、酒蔵を大事にしていこうという思いは地域の方に強くありましたか？

とてもありました。酒蔵の雰囲気、酒蔵の街に住みたいという方も沢山いらっしやいます。「酒蔵のある街並みが好きだったから引っ越してきました。」というアンケートもたくさんあります。

魚崎は周りと雰囲気違いますよね。

そういつていただけると嬉しいですね。そういう気持ちでみんな街の清掃もしていますし、今後は少しずつ人気が上がってくるのではないかと思います。一方で建物も和風の作りが嫌な方の中にはいます。嫌だと言う方に対して我々は「昔ながらの酒蔵の文化ですか

魚崎にとって酒蔵とは何ですか？

文化の最たるものですね。魚崎郷酒蔵の街。この界隈の人だと「魚崎と言ったら酒蔵だね」となるでしょうね。これを、出来るだけ他都市に広げようと活動しています。どんな活動をしているか知らないときよく聞きますが、実は委員の人にもまちなみ委員会の活動を知らない人がいます。まちなみ委員会のパンフレットにほとんどの情報が載っているのですが、パンフレットを読むようお願いしています。少なくとも質問があったときに答えられるように、と伝えています。一気に大それたことをしても成果はあがりません。一気によくしようとか、そういうのは続かないと思います。このまちづくりにおいても、まず近隣の住民の人たちに活動について知ってもらい、そこから広げていきたいです。このような地道な活動が大切だと思えます。今はSNSが普及し、お知らせなどを拡散することが可能ですが、やはり、自分達が状況をよく把握して活動することが基本です。これは、勉強にしても何にでも言えることだと思えます。まず自分が基本的なことを身につけておかないと、人に何も言えないし説明もできないからです。

委員会の活動内容をどのように若者に伝えていきますか？

酒造会社から資金やノベルティーを提供してもらって、「親子で学ぶ魚崎郷」というイベントを行っています。小学校、中学校にPRをしたら、その時はたくさんきてくれました。前回で約四〇〇名くらい来てくれました。このように若い人にはPRしているのですが、餅つきや和風な感じのものはあまり受けないのかもしれない。活動に対する意識づけをするのはなかなか難しいです。

他に、中学校の校長先生から、子どもたちにボランティアを体験させたいとお願ひされたので、子どもたちには、魚崎のモニユメントの清掃と違法看板・チラシを外してもらう作業をお願いしています。これも今年で二二年目になります。その作業の終わりに、決して対価を得る訳ではない、ボランティアの意義を伝えます。みなさんも大きくなったら私たちの後に続くような人になって欲しいです。たとえ一人でも、「昔おっちゃんがあんなこと言ってたな」と思い出してくれて、活動してくれたらいいなと思っています。活動の終わりに、お礼の代わりにトーホーストア

若者が魚崎の街の良さやありがたみに気づいてくれると後に続く人も出て来るのでしょうか。

それを期待してるんですけどね(笑)。単に行事を実施するのではなく、八〇代の方々に体験談を話していただき、なぜ、ボランティアをするのか、ボランティアの意義を簡単にわかりやすく説明していただいたりしています。そのとき、皆さん上手に話してくれまますので、生徒もちゃんと聞いています。小さい時の思い出はみんなあるので、その一環としてボランティアのことも思い出してくれたいと思います。そのような活動は大人になっても続いていくわけですから。自治会活動や社会運動など、子どもの時の体験を思い出してくれて後に続いてくれたらなと、願っています。

しかし、現状は、ボランティアに参加する若者は少ないです。それはどこのボランティア団体でも同じことが言えます。人材が高齢化してしまって、後に続く人が少ないです。いつまでもお人好しが続けている状態です。昔は企業は利益追求だけではなく、ボランティア活動に参加するなどの、社会貢献をすることによって、企業の価値を高めていきまし

さんのお弁当を食べます。その時にみんなが体験後の感想を言い合います。いつもなかなか良いことを話してくれます。しんどかったという子どもにはいますが、「もういっしょに街が綺麗になっていいんですね」とか話してくれる子どももいます。だから、我々も責任重大だと思っています。



↑震災前煉瓦つくりの酒蔵(今村さん所蔵)



↑現代の酒蔵

た。根本はそうなっていくべきだと思います。お金持ちはお金持ちでお金を提供してくれればいいのですが、口はだしてもお金は出さなかつたり、全く関わらなかつたりする人もいます。だからボランティアをする人が限られてきます。なかなか現役では難しいですが、日曜日など空いた日に地域の活動に貢献する。そのような体制が変わってくれたらいいかなと思います。なかなか難しいです。別に何の見返りもないわけでも、もちろんそのような期待もしてないわけですが、ボランティア活動とはそのようなものです。少しずつでも役割分担をして、色々なことをできればと思います。

取材日 二〇一七年 一月二日



↑今村さん

# より良い暮らしのための『財産区』

魚崎財産区議会 松宮功議長

議員の皆様

## 財産区とは？

かつて日本の農村社会において、村落住民は、山林を薪・山菜・茅草の採取、狩猟、農業用の草肥の供給に利用していました。そのような山林、ため池、墓地などは住民皆の共有財産だったのです。かつての村落の単位は明治以降断続的に行われた市町村合併によって規模を大きくし、現在のような市町村の姿になりました。財産区制度の成り立ちには、市町村合併と密接に関係します。最初に実施された明治の大合併において、村落の共有財産は合併後の新しい市町村の財産に吸収されることとされたため、合併すると村落の共有財産を自由に利用できなくなるのではないかと懸念が生まれました。その懸念を解消するために設けられたのが財産区です。つまり財産区とは、かつての村落や旧市町村の住民の共有財産を、合併後も維持、管理させるために設けられた制度で、特別地方公共団体の一つです。

財産区は全国に四〇〇弱あり、大阪府と兵庫県に多く存在します。魚崎財産区は、一九五〇年の神戸市との合併

時に、旧魚崎町の公有地を維持するために設けられました。財産区の形態には財産区議会と財産区管理委員会があります。

魚崎の財産区は神戸市で唯一の財産区議会です（一九五〇年当時、管理委員会が制度化されていなかったため）。魚崎財産区は、主として不動産の貸付地の賃料や基金の利息を収入として、圧倒的な経済力を誇っています。魚崎財産区はその経済力を生かし、区域住民の福祉向上をめざして、いろいろな事業を実施しています。主なものとして、集会施設として横屋会館、魚崎会館、魚崎西町会館の三会館を、福祉コミュニティ施設として魚崎わかばサロンを設け、管理運営しています。

毎年敬老の日には、ご長寿をお祝いして満六九歳以上の方に「尚顔会」の記念品を送りしています。また、婦人会、消防団等地域団体や区域内の小中学校等へ助成するなど、地域の活動を支えています。

## 一、財産区管理会ではなく議会が設置されていることのメリットについて

財産区は、全国にたくさんありますが、そのほとんどが議会ではありません。財産区議会議員は、市会議員とか県議会議員などと同じく公職選挙法にのっとって、魚崎町の場合は一六議席をめぐって四年に一度の選挙をします。議会ですから、魚崎に住んでおられる方ならどなたでも立候補できます。だから、長く住んでおられる方も来たばかりの方も関係なく議員に選ばれたら、その議員が運営するということ平等な仕組みになっているんですね。しかし裏を返せば、住民ならば誰でも議員になれるので、魚崎をどれだけ愛しているか、将来の魚崎はどうあるべきかということなどがわかっていて立候補しているかどうか、地元住民のためになるかどうかその人の思いや尺度が人により違ったりするんです。だからどこに助成するか、財産区として何をやっていくかということについて議会で議論して決定しています。

他方で財産区管理会は、地域の古いメンバー、世襲制や昔から地域のためにご苦労なされた人が指名されて、理事や役員に就いて運

営されています。財産区は、江戸の昔からずっと維持してきた共有財産があるので設置されています。そして、昔からそれを利用してきた古い家、要するに庄屋さんや村の世話人さんだった家の人たちですね。そういった人たちが管理会の委員になって運営し、それを引き継いでいます。お互い仲間内で、古い先祖の財産を大事に有効に使うという意識の人たちばかりだから、極端な話、色が濃いです。他方で偏った動きをする可能性もあります。ところが財産区議会は、昔からの先祖の財産を、少なくとも財産区の区域、魚崎に住んでおられる方には平等にすべての人が享受できるようにする仕組みになっています。いろいろな立場はありますが、その中でどうしたらよいかという議論をしているので、偏りが少ないと思います。

財産区議会は執行機関ではありません。議会は意思決定機関であって、いろいろなことを決めるけど、お金を管理する執行機関ではありません。例えば、魚崎保育所から小学校、中学校を含め地域の各種団体、三〇団体以上に助成金を渡しています。その補助金の算定をするのもこの財産区の議会で行います。各団体から代表者、経理の方などに来ていただいて、彼らから事情説明を聞きます。それを

基に議員で議論してどの団体にいくら出そうということを決めています。しかし、実際にお金の管理をしているのは神戸市で、東灘区役所総務課の中に財産区事務局があります。財産区議会の場合東灘区役所に事務局があるので、当然、神戸市の会計規則に準じて運用していて、癒着がないような公平性が保たれています。

財産区は、実は子どもからお年寄りまで幅広く、この地域で実施されている活動に助成しています。住民のほとんどの方が関連している学校をはじめ、子ども会から老人会あるいは婦人会等を含めてね。だから、地域のほとんどの方々がなんらかの形で助成の対象になっていきます。見境なしに助成せず、それぞれの説明を聞きながら検討して決定しながら運営しています。

## 二. 議会であるゆえの特徴や苦勞

議会であるゆえの苦勞は結構あります。例えば地域団体に対して助成するときに、その団体の人数や実績に合わせて予算組みをします。各団体から「こういう活動をするので是非協力してほしい」という要望を受けて議員三人以上が議会に提案すると、それについて

議会で話し合います。これが、目的によっては議会審議が紛糾することがあります。議会の中でいろいろな意見が出てくるわけですし、住民の皆さんの要望を聞いて出てきた提案です。ですから、絶対的な評価はなかなかしにくいのです。ですから、すべての提案が全会一致というのとはなかなか難しいです。

昔は、サラリーマン出身議員は少なかったです。基本的には時間的に余裕のある方々が魚崎町のためにということでも議員になっていたので、魚崎で自営業などの仕事をされている方が多かったです。あるいはそのOBの方もいらっしゃいました。だから、仕事と絡めてという部分、あるいは地縁、血縁、そういったこともありました。サラリーマン上りの方はそういうことはあまり考えないから、最初はギクシャクすることもありましたね。ですが、我々も地元で長年生活していますから、この苦勞は当たり前と、地域のために良くなれば良いということを考えてみんな動いています。

## 三. これまで開催された議会審議の中で一番印象深い審議内容

(Aさんの場合)

なぜ私が財産区議会議員になったかと言いますと、実は横屋のだんじりの小屋を建てたいという思いがあったからです。だんじりは一種の地域の文化財だということで、しかるべきところに建てたい、ということを提案しました。反対意見も多々ありました。当時の区長も反対気味だったのですが、それをなんとか協議できるようにもって行き、議会を通さなければならぬので、議長をはじめ、議員のみなさんを説得したり納得してもらったりしました。それが私の中で印象に残っています。

(Bさんの場合)

小学校の綴帳や五〇Mプールに寄付したことが印象に残っています。また神戸市教育委員会が実行する前に魚崎の全小中学校、幼稚園に防犯カメラを設置しました。子どもの登下校の時や普段の学校生活での安全を守りたいという思いで、子どもたちのために作りました。

## 四. 阪神淡路大震災での震災前後の 変化…震災時における財産区の活動

震災時、財産区としては議会で検討しましたが、何もできませんでした。震災後に、住民に対して「お金を一人あたり何円で寄付したらどうだろうか」という意見もあつたらしいですが、それは本来の財産区の活動の趣旨に合わないと思います。結局、何もできませんでした。姉妹町の江府町から救援物資が来た時に財産区も関わりましたが、住民の名簿があるにしても当時はそういうのが機能しなくて、救援物資を公平に配ることが難しかったですね。それから、財産区会館には横屋、魚崎西町、魚崎会館の三つがありますが、指定避難所ではありません。学校などの市の公共の建物は全部避難所に指定されていますがね。震災の時に、何らかの手段で財産区の会館の中に入って過ごしていたという方は結構いるのですが、それは指定された避難所としてそうしているのではなく、住むところがないのでそれならば仕方ないなということ仮設の建物ができるまで過ごしてもらっていたということなんです。だから、震災の時に財産区としてどういう手当をすればいいのかと

いうことは、我々のこれからの課題です。避難所になると救済物資の配布もそこが拠点になってくるので、当時財産区会館へ避難された方には避難物資が届いていませんでした。そういう所に私たちは目を向けて、市民の安全、福祉のために助成しようという話をしていくんですよ。防災の会議で「こういうことがやりたいんだ」「こういう風に協力してくれ」と言われたら、我々議会の方で、良ければ助成するし、これはちよっとダメとなれば助成しない。第一には神戸市や県が主体となり、そこでもかかない切れぬい部分を魚崎町財産区が負担しましょうというスタンスなんです。

### 五. 地域における財産区の役割

財産区の本来の活動というのは、自分自身が活動することではなくて、地域をバックアップすることです。財産区は、そのようにして地域活動の一つのシステムを作っていると思います。今は防災に力を入れていて住民の意見を取り入れて財産区でできることを形にしています。例えば、地域での防犯や防災の活動のバックアップなどです。そうし

た活動をしているとどうしても足りないことも出てくるので、それをどうするかということが今後の課題です。私たちよりあとの人が安全に生きられるようになるように、我々が進んでやらなければならないと思っています。

### 六. 震災時の経験について

(Cさんの場合)

自分の家は、母屋がもう一〇〇年前からの古い家だからペしゃんこになってしまったのですが、私は庭に建てていた家にいたのでなんとか助かりました。母屋にいた母親の安否を確認するために、外から母親に「生きてるか？」って言いました。そうすると母親が「はあー」言いました。いまだにその時に言った言葉や行動を思い出します。我が親に「生きてるか？」いうて「はあー」いうんじゃ、こっちも必死になりますよ。

(Dさんの場合)

ちよとど魚崎南町七丁目から魚崎南町四丁目に行こうとしている間に、人が「助けてくれー、助けてくれー」と言っていたが、私は「母親と妹を見にいかなあかんー」と断って、

知らない人でもせめて顔だけは繋いでないといけないと思って、防災の活動に入っています。

取材日 二〇一七年 一月二〇日 三〇日

四三号線をわたって魚崎神社から西へ入っていったんです。震災前は、神社から西に行くとな多くの酒蔵が建ち並んでましたがその酒蔵がみんな倒れていました。震災前の酒蔵というのは、基礎は石でその上に柱を建てていました。今でこそ冷房があるけど、震災前は六甲山からの北風を入れて蔵を冷やしていたので、北風が入るように土間のところにも窓があったんです。そこに地震がきたので多くの酒蔵が倒れてしまいました。そして親のところに着いたら家が倒れていて、母親、妹に「生きとるかー」と言いました。そしたら声が聞こえてきたんです。小さいこたつの中に顔を突っ込んで生きていました。それで何とか助け出したんです。

(Eさんの場合)

私の家と親の家の両方が潰れてしまったので小学校に避難しました。ある時には南にあるガスタンクが爆発するとかで北の方へ逃げたりもしました。震災時の私はサラリーマンをしており、私のようなサラリーマンをしている男は地域との顔の繋がりがほとんどありませんでした。地域の繋がりは嫁さんと子どもとの繋がりで、避難所に行ってもお父さん同士は「はじめまして」ということが多かったんです。そういう経験もありましたので、



↑左から山本さん、松宮さん



↑左から佐藤さん、松下さん、森本さん



↑左から碓井寛さん、岸さん、碓井邦秋さん

## 二つ目の『だんじり』

魚崎地車保存会  
横屋地車保存会

吉川地会長  
阿部経一さん  
石本幸市郎さん  
高西清成さん

### 【魚崎だんじり】

#### 一・吉川さんの子供時代のだんじり

昭和三八年から六一年まではだんじりがストップしてたんです。その後、六一年に先輩等がだんじりを復活させました。私にとつては、子ども頃からだんじりが動いていたというわけでは無いので、昔のだんじりの印象は小さかったのでありません。でも、神輿（みこし）というのはずっとありました。大神輿と言って、大勢の大人で持ちます。当時魚崎には、漁師が多かったので、海まで神輿を担いで行って海に沈めていたらしいです。今では、大きな神輿を担ぐのに人手が足りなかつたり、神輿が傷んでしまつてるので、運ぶのはどうしても難しく、お祭りの時に展示するだけになっていきます。こういったものが私の子どもの頃の思い出ですね。

#### 二・だんじりの変化とだんじりが担う新旧住民同士の繋がりが

だんじりで変わったことと言えば法被（はつぴ）です。昔はやはり若い子ばかりいい服装をしたので、やはり形から入ります。今は若い子もすっかりしているので安心していきます。それから、昔は大神輿と子供神輿と云うのがありまして、先ほど言ったように、大神輿は漁師さんが担いでいました。それから昔から、魚崎には、だんじりにも大だんじりと子だんじりの二台があります。ですから今でも祭りの時には、子ども神輿、子だんじり、大だんじりの三台で町内をまわるので、たくさんのお客さんが要りますが、それが足りなくて大変でした。

そこで今は、自治会の方にお手伝いしていただいでお祭りをしてます。だんじり祭りの時自治会の方には子だんじり、大だんじり、子ども神輿のお手伝いなどをしてもらっています。逆に僕たちも自治会主催の盆踊りや夜

店などの行事のお手伝いをさせていたただいてます。だんじりの時お世話になってることのお返しに、だんじりの若い子たちにも参加してもらって、みんなで自治会の行事を手伝つたりゴミ拾いをしたりしています。魚崎には「翔龍会」というだんじりの青年会があります。彼らも年末の「火の用心」のお手伝いをしていきます。このような関係があるから昔と比べると、今のだんじりの方が住民同士の親交があると思います。昔は自治会とだんじり保存会との間にそういうつながりもあまりありませんでしたが、今は親交を深めています。だから今、祭りの名前も、だんじり祭りでは無く、「魚崎まつり」に変えたんです。

#### 三・震災後のだんじりの復旧

地震が起きた後は、潰れている家に先輩方と助けに行きました。だんじりについて言えば、屋根が少し潰れていましたが、だんじりそのものには何も損傷はなく、すぐに出せる状態でした。それに、震災で元気をなくしている時に、だんじりは早くださないといけないという話でまとまりました。もちろん、被災しているところにだんじりを出してもいいのだから、不謹慎ではないだろうかという

思いはありましたが、どこの地域でもだんじりで元氣付けをしなればならないと思つたのではないのでしょうか。どこの地域でも、震災の年にだんじりを出していました。昔は魚崎のだんじりもご存じのとおり、魚崎には酒蔵が凄くたくさんあり、儲けていてお金持ちでした。その頃、酒蔵の人たちはだんじりにもよくしてくれていたみたいです。震災後、倒壊した酒蔵は売り払われてしまつて、残っているのは本場に少ないです。酒蔵の跡地にはマンションが建つて、住んでる人ももう殆どが魚崎以外から来た人になりました。親が魚崎に住んでいて、その子どもがマンションに入る場合もあるけれど。だから、魚崎小学校の児童数も日本一になったことがあります。

#### 四・財産区との繋がりが

やはりだんじりは、動かす時に高額のお金がかかります。だから寄付を集めないといけません。頑張つて寄付を集めても足りない時に、財産区にお願いに行きます。でも（議会を設けている）魚崎の財産区の財産は神戸市が管理しているので、僕らや議員さんだけでは支出を決められません。他のところ（財産



んです。教育委員会文化財課というところに書類を書いて提出しなければなりません。最初は満額近くの補助が出ていましたが、最近では申し込む人が多くなってきて、減額されてきています。しかし行政が補助するお金が無くなってしまおうと、そこでもう打ち切りになっってしまうから。そういうったお金と僕たちが持っているお金で足りない部分を財産区に出していただいて、そのお金を使ってだんじりを綺麗にしました。そういうことで、次に修理するときどうするかを話し合っています。大だんじりの古くなった飾幕も「まだどこかに飾ったりするのはどうだろうか」という話も出ましたが、難しくてもまだ決まっていけないので決まり次第です。

取材日 二〇一七年 二月一九日



↑お話を伺った吉川さんとゼミ生

区管理会)では、管理会の委員さんが良しと言えばお金を出せるのですが。他の地域のだんじり保存会は「あんたところはお金があつてええな」と言っていますが、「うちは神戸市の管理下やからなかなかだしてくれへんねん」と言っています。

平成一五年に大修理をした時には、寄付で足りない分を財産区に出してもらいました。飾り幕という、だんじりの横や前に垂らしている幕があるのですが、これがすごく高いんです。それから提灯でも夜提灯は、蝋燭をいれてその灯りが透けてみえるもので薄いから安いのですが、昼提灯という分厚い飾り布で作られた高いものも新調して欲しいということになったので、財産区に無理を言って、平成一九年にすごい額を出してもらいました。だから「もうこれで堪忍してくれ」と言われています。

つまり、だんじりは「金食い虫や」と、言う人もいます。楽しいけど、代償費用も高い。あるところの地域のだんじりで「あんなにした、こんなした」と言っていると、「あんなええわ、こんなええわ」と言っていて、「うちもあんなにしてほしい」となります。お金があつたらできるのですが、お金がないからみんな困っているのです。本当のことを言っていると、

どの地域もこのような感じですが。どの地域でも同じですが、だんじりばかりに財産区のお金を出せないですから。財産区には一年に一回、協力してもらえようように、申請書を提出しています。基本的に財産区議会は、だんじりで怪我があつたら大変ですから、こまの修理代や運行の安全確保に必要な場合補助を出してくれています。

ある人は、「もし魚崎財産区がなくなつて魚崎の財産が神戸市の財産と一緒になつてしまつたら、うちの財産は使われてしまつたらうな」と言っています。

僕は、財産区がなければだんじりの運行はできないだろうと思います。だんじりに必要な額が大きすぎますから。例えばだんじりを新調することになったら億のお金が必要になります。他の地域では、財産区管理会の人たちがだんじりをする人が多いので、財産区のお金は出やすいのではないのでしょうか。例えば、住吉では住吉学園のバックアップがあります。それに対して、魚崎財産区は、出していないので文句を言うべきではないのですが、お金が少し出にくいのです。だから、子だんじりを直してもらつた時に、無形文化財保全のための補助金に申請して、援助していただいています。しかしこの手続きが大変な



↑魚崎の大だんじり  
(「東灘だんじり会」ホームページより)

## 【横屋だんじり】

### 一・子どもの頃の魚崎小学校について (一九七〇年代、八〇年代前半ごろ)

小学校には一学年七、八クラスあり人数が多かったです。マンモス校なので、運動会も年に二回、春に小運動会、秋に大運動会を開催していました。七〇年代後半には一〇クラスあるときもあって、その後、福池小学校ができました。プールは五〇Mのプールで、水泳に力を入れていました。夏休みには一週間の水練学校があって、八級から一級までの級を設けて取らせていました。

当時の遊びについて言えば、周辺道路にはまだ地道が多かったので、道路が舗装されたときにローラースケートで遊ぶのが流行っていたのを覚えています。校区が広く、南の魚崎浜町から登校すると徒歩で四五分かかりました。浜町には酒蔵や会社が多く、子どもが遊べる公園も少なかったので、登下校にも遊びに行くのにも時間がかかりました。一九七三年に創立一〇〇周年を迎えたのを覚えています。当時の校舎の床は木造だったので、月に一回油引きがありました。木の床が腐ら

はありません。曳き手に加えて太鼓や鐘の叩き手も要りません。では誰が太鼓や鐘を叩くのか？となっても叩ける人がいなかったため、復活の年の鳴り物の叩き手は灘区でだんじりをしていく方に助太刀をしていただきまし

た。区政五〇周年の記念パレードだから参加させてもらって、だんじりを出したという感じでしたが、これを機にだんじりを復活させて毎年続けていきたいと思います。そこで、翌年の二〇〇一年に、傷んでいた地車を大改修することになりました。横屋の地車は淡路島で明治時代に作られて昭和になつて横屋に来たものだったので、淡路島の梶内だんじりさんに修理してもらいました。ちなみに、神戸の地車は、神戸型といつて、前に飾り幕、鳴り物は後ろに配置しますが、淡路は前後が逆のスタイルです。改修後、だんじりは神戸型にモデルチェンジをして帰ってきました。

だんじりの運行を続けていくには、鳴り物の練習はもちろん、だんじりとはどういうものなのかという基本的な知識を身につけることが大切です。まずだんじりの鳴り物は、太鼓と鐘の節に意味があります。また鳴り物はだんじりの動きに合わせて叩いているではあ

ないようにワックスを自分たちで塗っていて、その時の石油のような匂いが今でも印象深いです。魚崎小学校の校舎は、上から見ると飛行機の形の独特な形をして、それを誇りに持っている人が多かったです。震災後の建て替えの時に、形を変えないでほしいという要望が多く、外観はそのまま残されています。

### 二・だんじりを復活させた経緯

東灘区にはだんじりが沢山あります。横屋のだんじりは一時期途絶えていた時期がありました。それを復活させようという時にお声がかかりました。ぜひやりたいと言ったのが最初です。お声をかけてくださったのは今の会長の黒田さんです。だんじりは神社の庫に置いてありましたが、運行はしていませんでした。黒田さんの親御さん達の世代が昔だんじりを曳いていたという記憶があったので、復活させようという声があがりました。

二〇〇〇年に東灘区五〇周年・震災復興記念だんじりパレードが開催されることになりました。横屋だんじりも出そうという動きになりました。いろいろ検討し、最終的にだんじりを出すことになりましたが、だんじりというのは、人手が集まったからすぐに運行できるもので

りません。だんじりの屋根に登って踊ったり、だんじりを四つ角で曲げたり走ったり戻したりする事は危険を伴うので、どこがどう危ないのか、だんじりはどうやって動くのかというのを理解しないとダメです。そういった知識は昔のことを知る黒田さんから聞いたり、東灘区の他地区のだんじり運行から学びました。また灘区や芦屋など、春だけでなく秋にだんじり運行を行っている所にも見に行き、どういう風に運行しているのか学びました。

年々続けていく中で地域の方がたくさん参加してくれるようになって、今に至っています。復活当初は公園の隅で太鼓などの鳴り物の練習をしていると、近隣の方から「うるさい」という苦情がきていました。鐘をカンカン鳴らすとすぐに警察の方が来られて、「苦情入ったから止めてくれ」と注意をされました。仕方なく六甲アイランドの埠頭の端など人気がないところで練習をしていました。今は小学校で練習ができるようになっていて、地域の方の印象も良くなり、理解を得られていると思います。

### 三 地域におけるだんじりの意義

だんじりには、子どもから大人まで幅広い年代の方が参加することができます。子どもを取り巻く環境について考えたときに、だんじりは、子どもと大人をつなげる接点になると思います。また、子ども達だけでなく自分たちも、だんじりを通して様々な人と知り合うことができます。だんじりを曳くことは危険が伴うことがあるので、年上の子と年下の子、先輩と後輩といった縦の関係が自然と、出来上がっていきます。そのことはよその子ども叱れる関係であることに加えて、上の子が下の子の面倒を見る関係や、地域での挨拶や団結にもつながっていると思います。だんじりはそのようなコミュニケーションづくりにも貢献していることにも魅力を感じます。

横屋の法被のデザインには想いが込められています。もともと横屋の祭り衣装は、ピンクのちゃんちゃんこでした。今の時代、ピンクのちゃんちゃんこは若い子は嫌がりますのでどうしても法被にしたいと思っていました。いざ「どんな法被にするのか」となった時に、『横屋らしい品のあるようなデザインにしたい』との要望がありました。お祭りの中『品がある』とはどのようなデザインなのだ

ろうと思案しました。

検討の結果、法被は遠くから見ても『これが横屋だ』と見てわかるようにシンプルなデザインで、色も白にしました。当時、横屋地区周辺には白い法被を纏っている地区はありませんでした。あと、法被の下の部分には三本の線が均等に入っています。三本の線には意味があります。一番下は子ども達の線、二本目は大人の線、一番上は年配者の線を表しています。子どもや若い子だけが粋がったり、年配者が権力を振りかざしてもいけない、全体的に人が平等にお祭りを楽しめるようにという願いと想いを込めて、幅が均等な三本線を入れました。

だんじり祭りでは地区の中を巡回している、家から外に出られないお年寄りの方々が、家の中から手を振っていたり、笑顔で覗いてくれたりして喜んでくれてるのが分かります。だんじりは、祭りに参加する人だけのものではなく地域全体の人々に喜んでもらえるものだと思います。だから子どもたちの代にもつなげていけるよう、だんじりに関わっています。また、横屋地車保存会では、だんじり巡回だけでなく地域活動も行っています。神社の清掃をはじめ、大晦日の甘酒の振舞いや盆踊りなどの地域活動を行うことでメ

ンバーが顔を揃える機会も増え、意思の疎通が図りやすくなり、さらなる地域活動につながるという循環を産み出していると思います。

七月には川井公園で盆踊り大会が行われますが、そのオープニングでだんじりの鳴り物を鳴らします。「これから盆踊りが始まりですよ」という合図を鳴物ですというのを、五、六年くらい前から行っています。地域の方から「景気づけに鳴り物を鳴らしてほしい」と仰っていただけるようにもなりました。

### 四 震災がだんじりに与えた影響について

震災後、だんじりが地域に与える意味が見直され、参加者が増えました。横屋は震災の前、だんじりは運行していませんでしたが震災後に地域がまとまらないといけないうことで、東灘区の各地域でだんじり巡行を早期に復活させたと聞いています。だんじりを通じてのつながりが地域の団結を強めていくということ、復活させた地域が多いのではないのでしょうか。横屋がだんじり巡行を復活させたのは震災の五年後です。その後年々

だんじりまつりへの参加者は増えています。横屋のだんじりは、「無理をしない安心できるまつりだ」と保護者の方から見てもらっています。「横屋のお祭りだったら行っていいよ」と言ってもらえているようで、地域の方から見て、安心で参加しやすい雰囲気であることは嬉しく思います。

取材日 二〇一七年 一月五日



↑左から石本さん、高西さん、阿部さん



↑復活した横屋のだんじり  
(阿部さんご提供 / 2017年5月撮影)

## 編集後記

**中村 龍二(担当 防災福祉コミュニティ)**  
 私は阪神淡路大震災の年に生まれました。授業で震災時のことを学び、実際に被災した方の話を伺う機会も多くなりました。今回、震災の影響が大きかった魚崎町のことを冊子にするにあたり、私は防災関係について調べたいと強く思いました。この冊子を通じて、少しでも防災のことを知っていたければ幸いです。

**宗實 晃生(担当 自治会)**  
 私は冊子の作成で自治会を担当しました。話を伺ううちに、魚崎の街が好きで、街を良くしたいという強い思いを持って活動されていることがわかりました。その思いがこの冊子を通して皆さんに少しでも感じてもらえたら嬉しいです。

**渡辺 千春(担当 酒蔵の町並み保存)**  
 今回、魚崎について冊子を作成するにあたり、多くのお話を伺いました。取材を通して、多くの方々の活動があつて今の魚崎が成り立っていることがわかりました。この冊子を通じてどんな方々が、どんな活動を行つて魚崎の街を作り、そして後世に伝えていこうとおられるのか、という事を知っていただければと思います。

**瑞原 桃(担当 横屋だんじり)**  
 今回の冊子作成で横屋だんじりについて書かせていただきました。だんじりのお話を伺い、積極的な取り組みが行われていることに関心しました。この冊子を通じて魚崎の魅力を感じていただければいいと思います。

**岡本 侑佳(担当 デザイン、全体編集)**  
 この冊子作成にあたり、私たちは実際魚崎の地域活動に携わっておられる方々にお話を伺い、魚崎の歴史や文化について学ぶことができました。地域住民のつながりが消えつつある現代で、魚崎の住民の方々はもちろん、魚崎をあまり知らない方にもこの冊子を読んで魚崎のことを知って少しでも興味をもって頂けたら幸いです。

**野田 浩佑(担当 表紙、まえがき、全体編集)**  
 今回、魚崎町についての冊子作成にあたり、取材させていただく中で魚崎のために熱い思いを持って活動されていることが伝わってきました。実際に魚崎町へ取材や撮影に伺う際に見た美しい川や歴史を感じる建物など素晴らしい所が沢山ありました。この冊子が魚崎の素晴らしいさを知るきっかけになれば幸いです。

**小杉 拓晃(担当 財産区)**  
 私は今回の冊子作成で魚崎の財産区について書かせてもらいました。財産区についての話はとても興味深いものが多く、とてもいい勉強になりました。この冊子を読んでもらい魚崎での財産区の働きを少しでも多くの人に知ってもらって、その重要性をより理解してもらえたらいいと思います。

**加藤 楓(担当 財産区)**  
 今回、ゼミ活動で魚崎についての冊子を作りました。私自身魚崎に住んでいるのですが、実際にお話を伺ってみて、知らないことの多さに驚きました。この冊子を通じて沢山の方に魚崎の魅力を知ってもらい、興味を持って頂けると嬉しいです。最後になりましたが、冊子制作にご協力頂きました皆様ありがとうございました。

**玉城 晴也(担当 魚崎だんじり)**  
 今回は魚崎地域に視点を置き、魚崎にお住いの沢山の方々に話を聞くことができました。今回の経験から自分たちの身近な地域でありながら、あまり認識のなかったことなども知ることができたので良かったと思います。また、魚崎には沢山の魅力があり、この冊子を通して多くの方に理解してもらい、地域の活性化に繋がって欲しいと思います。

**久保 はるか 教授**  
 地域の歴史を知ることが地域の個性・魅力を知ることにつながります。魚崎の魅力は、住民皆にとつて良い地域にしたいという熱い思いを持った方々の様々な活動によって支えられています。学生の皆さんが社会や地域でそのような人材に育ってくれたら嬉しく思います。



↑後列左から久保教授、加藤、端原、中村、岡本、野田  
 前列左から小杉、渡辺、玉城、宗實